

議事録

令和7年度 岡山県立倉敷天城中学校・高等学校 第2回学校運営協議会

日 時 令和7年11月28日(金) 15:00 ～ 17:00
場 所 倉敷天城中学校・高等学校 コンベンションホール

●出席者（敬称略）

【学校運営協議会委員】

稲田、猪木、上田、北村、藤南、橋本、藤木、藤井（校長）、森、山田
(10名出席)

【事務局】

蒲生、乙倉、迫田、三宅仁、皿海、景山、奥野、三澤、川崎、本城、越智、三阪、江原、吉田、斎藤

1 協議会の概要

今回の協議会は、学校運営に関する中間状況の確認と、学校運営協議会委員と生徒による意見交換を通じて、本校の教育活動の成果や課題、今後の方向性を共有することを目的として開催された。今回は初の試みとして、委員と生徒が直接対話するグループ協議が行われ、生徒の学びや探究活動の実態について具体的な意見交換が行われた。

2 令和7年度 各課・室、年次団の取組状況（中間）

中学校・高等学校ともに、各課・室および年次団の取組はおおむね計画どおり進んでおり、中間評価は全体として「概ね順調」と確認された。

中学校では、探究活動を中心とした教育活動が継続的に行われており、教職員の主体性を尊重しながら無理のない形で改善と充実が図られている。高等学校においても、進路指導や最終学年を中心に成果が見られ、着実な取組が進んでいることが報告された。

評価については、「謙虚な評価にとどまっているのではないか」という意見も出され、中学校段階での取組が高等学校での成果につながっている点をより積極的に評価する視点の重要性が確認された。また、中高で一貫した学習評価の見直しが進み、今後さらなる成果の可視化が期待されることが共有された。

中学校の課題研究については、長年にわたる取組の蓄積を生かし、生徒が主体的にテーマを設定し、教員との対話を通して内容を深めていることが説明され、その教育的価値が高く評価された。これらの中間状況および評価については、協議会として承認された。

3 委員と生徒による協議（グループ協議）

(1) 中学生グループ

中学生グループでは、課題研究を中心とした探究活動について、生徒自身の言葉で成果や課題が語られた。

生徒からは、1年次から積み重ねてきた探究活動の経験が、研究を進める上での基盤になっていること、一人で研究に取り組む責任の重さや難しさを感じながらも、工夫を重ねて取り組んでいることが紹介された。

また、友人や教員との関わりが研究を進めるうえで大きな支えになっており、互いに助言し合ったり、教え合ったりする中で新たな気づきが得られていることが共有された。

探究活動を通して、計画力、継続力、責任感、達成感、自分の考えを表現する力

などが身に付いたという実感が、生徒から具体的に示された。

委員からは、中学生の段階で長期間一つの課題に向き合う経験ができていたことの意義や、その経験が将来社会に出た際に大きな力になることについて評価が示された。今後は外部機関や地域との連携、発表の機会の拡充、分かりやすく伝える力を育てる場の設定などについて期待が寄せられた。

(2) 高校普通科グループ

高校普通科グループでは、歴史、地域防災、ボランティアなど、多様なテーマに基づく探究や問題意識が紹介された。

地域の歴史を調査し発信する取組では、史料不足や時間確保の課題が挙げられた一方、地域資源の活用や外部機関との連携によって、生徒が行っている研究を自分たちの身近な社会に広げる可能性が示された。

防災をテーマとした探究では、実地調査をもとに避難経路を検討する取組が紹介され、情報発信の際には表現方法に配慮することの重要性が確認された。また、既存の公的資料との比較や、多様な立場の視点を取り入れる必要性が指摘された。

ボランティアに関する問題提起では、参加しやすい仕組みづくりや情報発信の在り方、学校内での組織化、外部団体との連携の重要性が話し合われた。個人の問題意識を継続的・組織的な取組につなげていく視点が、今後の課題として共有された。

(3) 高校理数科グループ

高校理数科グループでは、研究活動をより発展させるための要望や問題意識が多く出された。

生徒からは、天体観測や専門的な研究、大学や研究機関との交流、学会参加、研究施設見学など、「本物・実物に触れる経験」を求める声が多く聞かれた。

委員からは、学会や講演会への参加機会、地域の研究機関や大学との連携の可能性が紹介されたほか、研究者と連絡を取る際の具体的な工夫や、学校としての支援の在り方について助言が行われた。

また、情報提供や人の紹介といった支援も重要であり、生徒の主体性を尊重しつつ、挑戦を後押しする環境づくりの必要性が確認された。

4 協議を通して確認された共通の視点

今回の協議を通して、次の点が共通認識として確認された。

- 中学生段階からの探究活動は、計画力、責任感、表現力、主体性を育成するうえで大きな効果をもっている。
- 生徒同士や教員との協働的な学びが、探究の質と継続性を高めている。
- 地域資源や外部機関との連携は、探究活動を社会につなげ、学びをさらに深める可能性をもっている。
- 生徒の意欲や挑戦を支えるためには、ルール整備と安心して活動できる環境づくりが重要である。

5 まとめ

委員からは、生徒の高い意欲や成長の様子に対する評価とともに、すべての生徒を支える視点の重要性や、校外とのつながりを広げていく必要性について意見が寄せられた。

本協議会で得られた視点や提案を今後の学校運営に生かし、探究的な学びを核とした教育活動のさらなる充実を図っていくことが確認された。